

JAMトピックス

JAM
ものづくり
シンポジウム

近未来の働き方を考える 第4次産業革命への対処法

第4次産業革命ともいわれるICTやIoT・AIなどの技術の進展が、社会や職場、技能の継承などをどのように変え、働く者はどう対処していくべきなのかを考える、JAMものづくりシンポジウム「近未来のものづくり・働き方を考える」が2017年5月27日、川崎市のラゾーナ川崎プラザソルで開かれ、JAM構成組合や企業などから約200人が参加した。



＜多くの質疑があったパネルディスカッション＞

スキルUPと人材育成

課題提起では藤川慎一 JAM副会長が次のように述べた。昨今人材不足と言われ求人倍率は高くなっているが、失業率も高い。仕事を求める人と企業が求める人材のミスマッチが大きな要因となっている。このため働く側ではいかにスキルを磨きキャリアパスを形成していくか、企業では人材をいかに育成していくかが大きな課題となる。また、ものづくりの技能継承については、従来の「俺の背中を見て習え」から様々なことがデータ化されるなど伝え方が変わってくる。生産性の向上ではものづくりの現場がデジタル化で現場そのものが付加価値の高いものが求められている。その変化の中でいかに雇用を維持していくかが働く側に問われている。日本のブランド力を生かそうと語る中村氏＞

AIは大量の失敗から学ぶ

基調講演に立った麻生英樹氏（国立産業技術総合研究所情報・人間工学領域人工知能研究センター副センター長）はAIとIoTの初歩の解説に

続いて、人工知能は従来と違い失敗から学ぶことを基本にしている。またWebを使ってスマホをはじめ様々なセンサーからRUBY CHAR="莫", "ばく">大な数のデータをリアルタイムで集め、知識として蓄積し、これを生物の脳の神経回路網と同じような情報処理を高速にしている。そのためサイバー空間に実世界と同じようなものができていると解説した。ものづくりへのインパクトについては、サプライチェーンのマネジメントや匠の技の知識化と伝承について述べ、製造現場の知識＝匠の技は暗黙知や未整理のものが多く指摘した。

特にAIは道具であり大事なことは使いこなすことだと強調し、データや解析結果を見て判断しアクションにつなげる力が必要と、データを生かせる人材が求められていると述べた。

二つの事例報告

このシンポジウムでは二つの企業から事例報告がされた。市光工業(株)人材開発課の畠山正氏は、技能者育成の現状と課題と題し、同社の技能道場での人材の早期育成、人材の多国籍化に対応できる「目で見て分かる管理」などについて報告。またアネスト岩田(株)福島工場の青木勇樹氏と人事グループの岩田仁氏からは足こぎ四輪車をマニュアルなしで自ら組立て順序を考えて作業する「カーファクトリー研修」を実施し、改善提案・評価などIE（インダストリアルエンジニアリング）を学ぶきっかけ作りをしているなど紹介があった。

“創造、が人間の仕事

会場の参加者との質疑応答では「AIの時代に人は何をするのか」との問いに登壇者からは「人でないといけないものがある。匠の技や創造やデザイン・人間相手の仕事だ。サービスと一体となったものづくりだ」と応じた。さらに今後の課題として政府が民間ではできない長期的視点でデータの整理やみんなが使えるようにする必要がある一などと述べた。